

# 壮春力歩

会長 鈴木 末一

## “なら”と“しか”

ならやま里山林周辺に、迷い鹿が舞い込むようになった。放置していると、手塩にかけた野菜や草花類が食い荒らされてしまう。見つけ次第、愛護会に連絡をとるようにしている。

国の天然記念物奈良公園の鹿は、2017年7月16日の時点での頭数は1,226である。過去最も多かったのは1994年の1,293で、以後1,100~1,200の間を推移していた。2009年から6年間は、1,000台となっていたが、近年漸増傾向にある。

奈良のシカは日の出とともに行動を開始し、採食場へ移動する。採食後は休息する場所(休み場)へ。夕方になると、採食しながら泊まり場へと移動する。日没後は泊まり場で採食したり、休息したりしながら朝まで過ごす。

個体の行動圏は10~20haで特定の休み場・採食場・泊まり場を持ち、ほぼ決まったルートで移動する。両性の安定的な群れ形成はほとんど認められない。オス・メス別々の休み場・泊まり場に入ることが多く、雌雄それぞれの生活体系による社会を組織している。

ところで、標題の「なら」と「しか」は前述の話題ではない。20年来の知己から聞いた「平仮名話し」の受け売りである。人に頼みごとをした時、ふたりの返事が「それならやります」と「それしかできません」だったら、貴方はどちらの人に頼みますか、と知己は語る。

例えば「教育」を「きょういく」と書けば、「今日行くところがある」かもしれないし、「教養」を「きょうよう」と書けば、「今日用事がある」かもしれないと言う。このような話題を手帳にびっしりと書き留めている。

この知人は介護事業に関わり、全国の施設を訪問している。持ちネタを入居者に語り掛けると、みるみる表情が明るく、にこやかになってくるのが分かると言う。目標や目的を持って過ごすことの大切さを教えられた。



## 虚往実帰

半世紀ほど前は、車社会にはなっておらず、バスや電車での通勤スタイルであった。ダルマストーブがあり、宿直制度もありの古き時代のことである。まだまだ駆け出しであったが、ストーブを囲んで夜な夜な先輩方からいろいろと教えられた。上司のお供でのお付き合いも社会勉強になった。

会議や研修で出張した場合、報告書には必ず「今日はこのようなことを学びました。明日から早速活かしていくように努力します」という内容のことを書くようにと、叩き込まれたのであった。毎回そのような訳にもいかないことは百も承知の上でのことであり、常に心掛けて物事に対処するようにとの厳しくもあり温かい教えでもあった。そのような日々の中で、今も忘れられない教えのひとつに「虚往実帰」という言葉がある。

『莊子(徳充符)』の王駘(おうたい)の物語の中で、『虚往実帰』という言葉が用いられている。中国の魯(ろ)という国の王駘は、足を切られた受刑者だったが、その人に教えを請う人が絶えない。孔子の弟子が孔子に対して、王駘のことを尋ねる。孔子は「自分も将来、王駘を先生として教えを請いたいのだ」と打ち明けた。孔子は、王駘の心ありようについて、静かに澄んだ水面のようであり、永遠に無くならない絶対自由の世界を心の中に持っている、その徳の高さを讃美。そして、「そのような聖人であるからこそ、その人から学ぼうと、方々から人々が集まり、正しく導かれて帰ってゆくのです」と語っている。

弘法大師空海は、中国で師事した恵果和尚を王駘と重ね、王駘に教えを請おうと方々から集まった人々に自分自身を重ね、この『虚往実帰』という言葉を用いた。恵果和尚というとても偉大な聖人に逢い、その方の静かに澄んだ水面のような心に、正しく導かれて満ちて帰国する。『虚往実帰』という四文字には、恵果和尚という真に仏道を体得した人の心ありようや、その偉大さをも表現されているといえよう。

凡人である私には無縁の世界かもしれないが、いつまでも覚えている言葉であるものですね。